

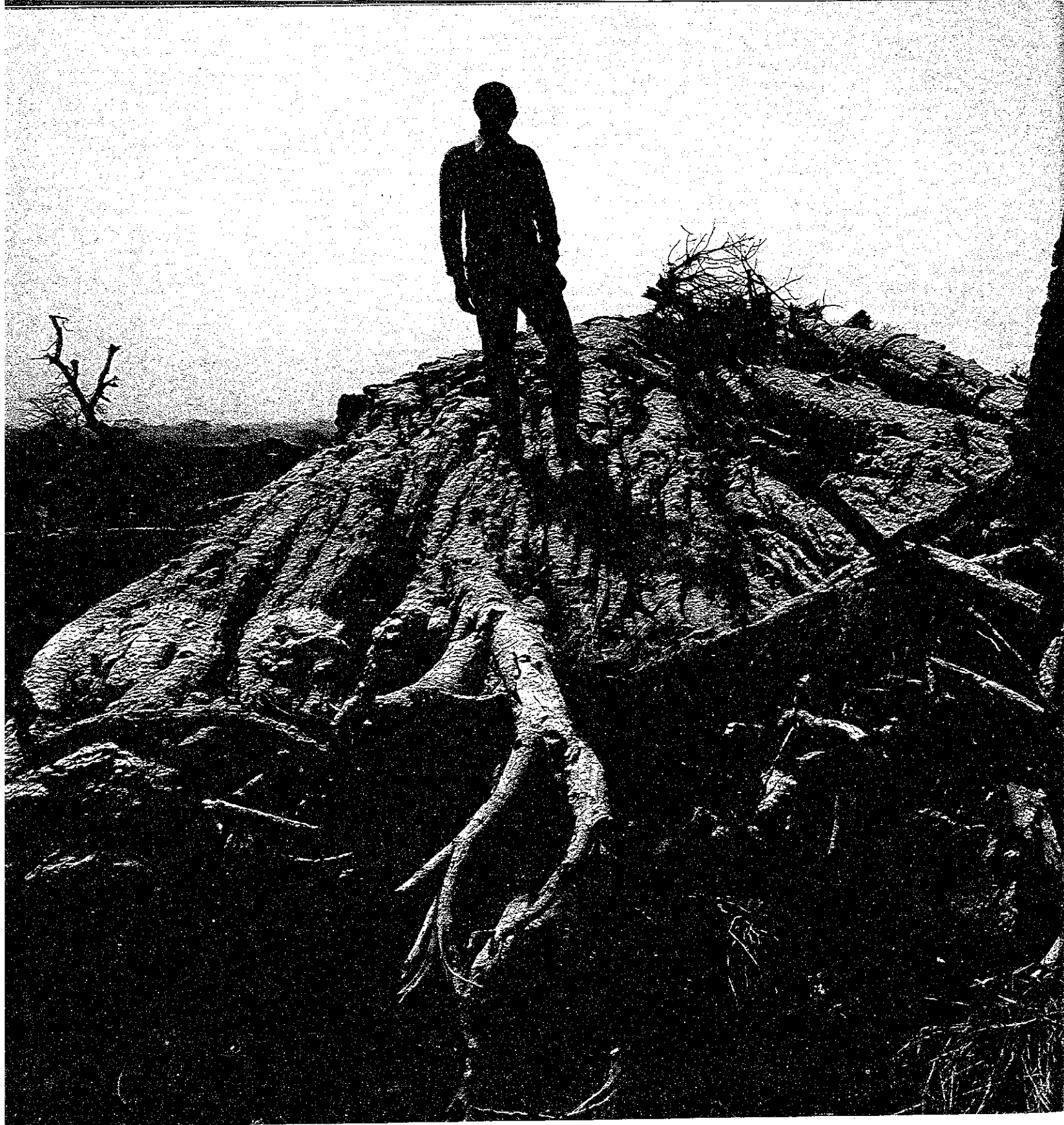
# [NIGER]

## 砂漠化との競争に、 緑化は勝たねばならない。

湿潤と砂漠化を繰り返してきたサハラ地域に、現在に到る砂漠化が進行しはじめたのは紀元前2000年頃とされている。以来家畜とともに生きるサハラの遊牧民たちは、砂漠に押されるかたちでゆくりと後退を続け、ニジェール中部あたりを留まっていた。急激な砂漠化が進行しはじめたのは20年前のことだ。それは現在ますます深刻化しつつある地球規模での気候変動の前兆でもあった。砂漠化はいまどのように進行しているのか。そして人間にそれを食い止める力はあるのだろうか。







バオバブ。  
アフリカのサヘルから  
サバンナにかけて自生している。  
ある種族は、  
先祖がこの樹から生まれたという言い伝えから  
バオバブを崇拝しているという。  
バオバブは、作家サン・テグジュペリの小説  
『星の王子さま』に登場したことで  
有名になった



## バオバブの 巨木は、 なぜ 倒れたか。

1975年5月、

サヘルに雨季の到来を告げる稲妻が

闇夜を切り裂いていた(上)

雷鳴は耳をつん裂く轟音となって

夜空を駆け抜けた。

その音と光に立ち向かうかのようにそそり立つ

バオバブ樹の雄々しい姿には、

サバンナの主の威厳に満ちた迫力があつた。

幹の直径が7~8メートルはあろうこの巨木は、

樹齢が数百年から千年にも達する

といわれている。

1990年2月、あのバオバブは

無惨な姿となって地上に横たわっていた。

この姿からして

倒れたのはこの2、3年内のことであろう。

根こそぎにされ、

ドッと倒れた無惨な姿は、

巨象の死骸を連想させた。

何百年と生きた巨木が

なぜこの時期に倒れたのであろうか……。

状況からして

巨大な幹が突風をまともに受けて

根こそぎにされたであろうことは明白であった。

枯死である。

急激な砂漠化にともなって

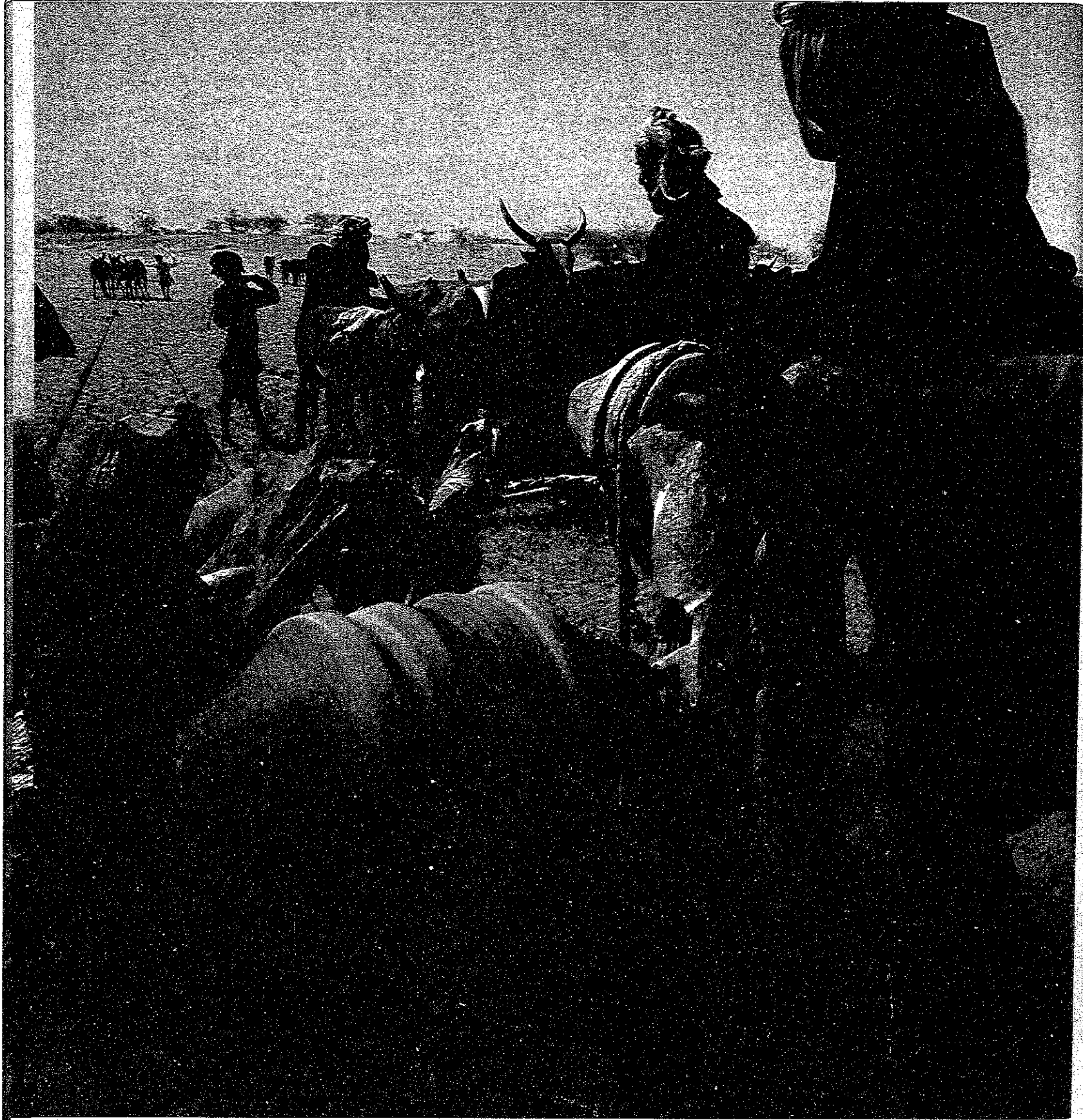
地下水脈は年々細っており、

いたるところで井戸が枯れている。

バオバブ樹は

この10年ほどの間、

砂漠化の最前線上に立っていたことは事実である。



4本のツルベを上げ下げしながら  
水汲みしている水場では、  
ツルベがもつれ合わぬよう  
男たちは常に緊張していた。  
木製の滑車は、キュル、キュル、キュルと、  
けたたましくきしみながら  
回り続けていた。  
突風が吹き抜けるたびに  
視界は砂埃に閉ざされた。  
その中から聞こえてくる滑車のきしむ音には、  
むせび泣くような悲しさがあつた



## 遊牧民の掘る井戸は、 最近ますます 深くなっている。

年々細く、深くなってゆく地下水脈を求めて、  
井戸は100メートル近くにまで  
掘り下げられている。  
このような井戸からの水汲みは  
人間の手には負えない。  
ロバやラクダにつるべを引かせて  
汲み上げる。

この遊牧民フラニ族は、  
一族で100頭前後の牛を飼育している。

深井戸からの水以外に  
地表に水気というものは一切無く、

人間の世話なくして、  
家畜は1日たりとも生きてはいられない。

サハラ奥地の山岳地帯、  
タッシリ・ナジェールの岩壁に、

かつてサハラが  
緑であった頃の壁画が残っているが、

紀元前6000年～紀元前2000年頃に

描かれた牛を追う遊牧民たちが  
このフラニ族の祖先といわれている。

この20年来の旱魃で多くの家畜を失い  
最大の被害をこうむってきたのが  
フラニとトゥアレグの遊牧民である。

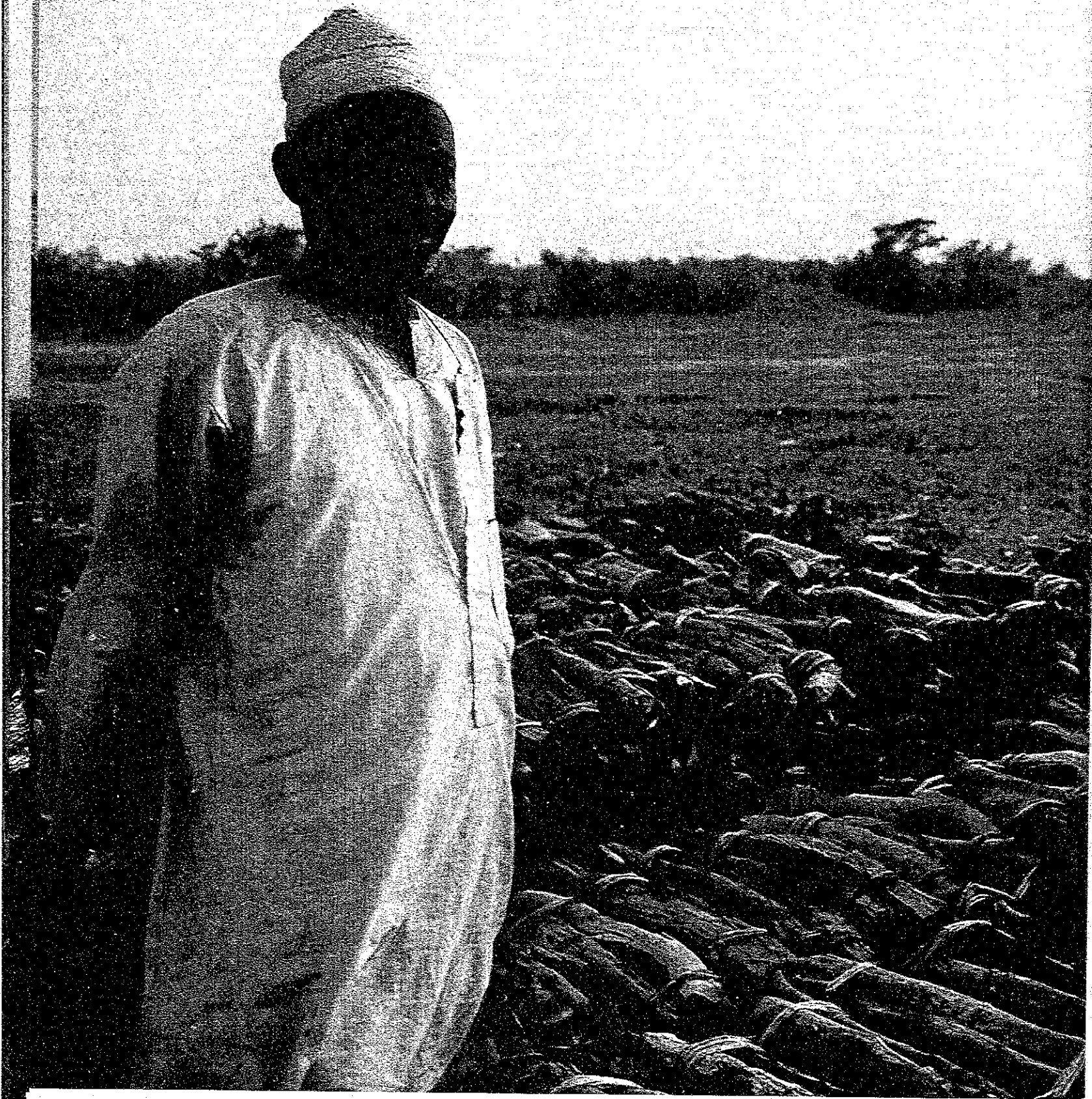
現在この地域で、

緑化推進のための

大々的な深井戸掘鑿の  
是非が論じられていた。

深井戸のために  
まわりの地下水位が下がり、

結果的に  
砂漠化を促進させることにも  
なりかねないからだ。



(左)ビニールポットに種を蒔く作業。  
 雨季のはじまるころに  
 苗木が移植できる大きさに育つように種を蒔く。  
 (中)せっかく苗を与えても、  
 意識の低い農民たちは  
 植えることを面倒がって、  
 こうして捨ててしまう。福原隊員は  
 「ショッキングな光景ですよ」と溜息をついていた  
 (右)苗を移植する福原隊員と村の青年たち。  
 現段階では、木を育てる以前に  
 人々の意識を目覚めさせることの方が  
 はるかに重要な仕事であろう。  
 1本の木を枯らさず、  
 あるいは家畜のエサにさせないで  
 いつまで守れるかということだ



## 薪を燃料とする 伝統的生活者に、 環境破壊を認識させるのは、 容易なことではない。

この土地に生きる人々は、生きる術のすべてを  
この痩せ細った土地から奪いとることで  
幾世代にもわたって生きてきた。  
遊牧民とて同じことだ。

砂漠にかりうじて生きている  
トゲだらけの草を家畜の胃袋を通して  
ミルクや肉にかえることで、  
この敵対的な土地で生き抜いてきた。  
緑化が叫ばれる一方で、この薪売りたちは  
野放しのままにされており、  
切りただけ切っては、  
こうして売っている。

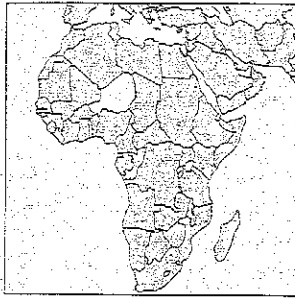
燃料といえば薪しかないこの土地で  
何年もこのように生きてきた彼らに、  
砂漠化と緑化を納得させるのは  
容易なことではなからう。

これまで、この土地に住む誰もが  
考えもしなかった課題なのだ。  
村のなかや農園の樹木ならともかく、  
薪のために伐採しているこの土地は、  
彼らの感覚では誰も見向きもしない  
単なる荒地に過ぎないのだから。  
地球規模で進行している  
環境破壊などという問題を、この人たちに  
納得させる方法はあるのだろうか。

(上)薪を売るジェルマ族の男と福原隊員。  
薪一束30円程度。ニジェール中部の街道沿いは、  
数千円おきにこのような光景が見られる。  
福原隊員が伐採と砂漠化について  
この薪売りの男に一言二言話してみたが  
まったく的はずれな答しか返ってこなかった。  
(右上)ユーカリの苗木を運ぶジェルマ族の少年。  
アフリカの人工林の大半はユーカリ樹。  
オーストラリア原産の  
この木は地下水の吸収量が著しく、  
まわりの土地の乾燥化を早めるといわれている。  
ジェルマ族は、ニジェール西部から  
マリにかけて分布する農耕民で、  
福原隊員はジェルマの農村を対象に  
植樹を進めようとしている。







**派遣職種●植林**  
 首都ニアメイを南に控えて、砂漠化最前線ともいえるウアラム郡の砂漠化防止のための植林計画。植林作業の際の地域住民への指導、樹木品種の選定などが仕事の内容である。たったひとりの隊員が孤軍奮闘していたが、平成2年度からは「緑の協力計画」として数名からなるチームが派遣される。最大の課題は植樹に対する住民の意識改革であろう。ニジェール●人口649万人(87年)首都ニアメイ。政体は共和制(軍制)。元首にA・セブ大統領。公用語はフランス語。宗教はイスラム教スンニ派80%

サヘル——アフリカ大陸、サハラ砂漠の南縁を東西に横切る半乾燥地域の呼び名である。

日本ではなじみの薄かったサヘルという言葉が、最近の地球規模での環境問題への関心の高まりとともに頻りに使われるようになった。サヘルこそ砂漠化現象の最前線である。北から波濤のように押し寄せてくる砂埃と熱風の脅威に対して、丸裸同然の人々は抵抗する手段を持たない。家畜を失ったとだけの遊牧民が難民となって南に逃がれていったかわからない。熱風にあおられた野火の勢いで砂漠化は南下を続けている。ニジェールは、この真只中にある。

筆者(野町)はニジェールを以前に2度訪れている。1975年と79年、2度ともサハラを縦断しての苦難の道行きだった。昨今のパリ〜ダカール・ラリーを通じて、サハラが砂のレース場として広く知られる以前のことである。ニジェール入りをしたのは2度とも4月から5月にかけての、気温が摂氏45度にも達する極暑の季節であった。熱風の荒れ狂うなか、スッ飛びそうな貧弱なテントのなかで母親に抱かれて眠る乳飲み児を見て、よくぞこれで人間が育つものだと舌を巻いたものだった。

このたび、訪れたのは2月の上旬で、灼けつく熱風の季節ではなかった。

ニジェール川河畔の首都ニアメイの北90キロにウアラムという村がある。砂漠のワディ(河谷)に沿って点在する村々のひとつである。電灯もない土壁の家でひとりの協力隊員が生活していた。福原亮(26歳)。福原の仕事は植林である。砂漠に木を植える……こんな辺境に耐えて2年間も悪戦苦闘している隊員がどんな男かと思っていたら、一見ひ弱に見える、六本木や原宿の盛り場を歩けば影も残さず溶けこんでしまいそうなタイプの青年だったのは、意外なことだった。

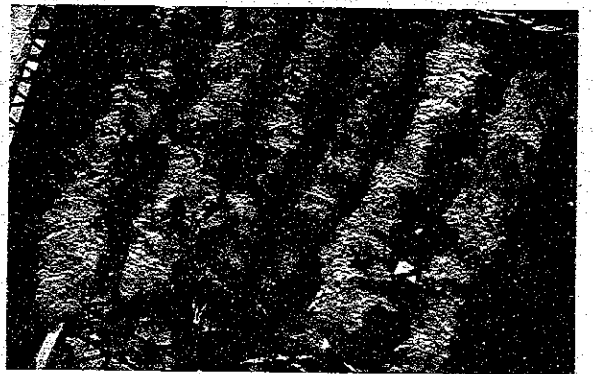
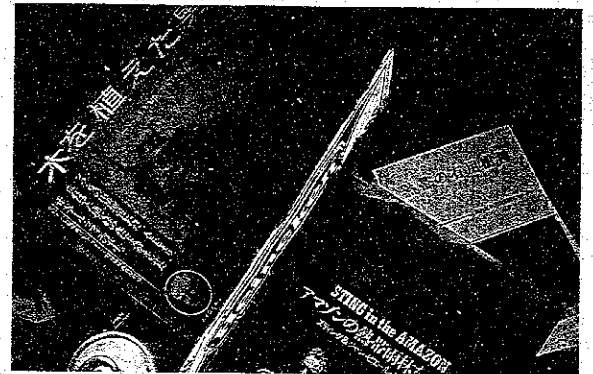
福原はウアラムの森林局に所属していた。ニジェールの政府機関がこの地域で植林運動を始めたのは最近のことで、また福原も初代の協力隊員としてこの地に派遣されてきた。砂漠の植林の最大の課題は、どれほどの苗木を植えようとも、よほど注意深く世話をしない

限り、自然に根づく木は皆無に等しいということである。本来この土地の人々は木を育てるなどという意識が、極めて低い。牧草を求めて移動を繰り返す遊牧民はもとより、雨季のわずかな雨を頼りにモロコシを蒔き、放置したままでわずかな収穫を得る農業を何世代にもわたって続けてきた農民たちである。それは植林を行っている当の役人と同じことだ。一年前、全国的に実施された植樹祭にあわせて、ウアラムでは雨季の雨を見込んで30万本ほど苗木を植えた。しかし、結局全滅に近い状態で、30万本の植樹を実施したという1枚の報告書を書き上げたに過ぎなかった。

「放っつけ植林なんですよ」と福原はなげく。その経験から、福原は個人的に、少しでも意識のありそうな農民を捜そうと付近の村々の巡回を始める。50ccバイクで出かけるのだが、ときには砂の道にハンドルを取られ、こけつまろびつを繰り返し、情無さに泣きながら巡ったこともあったという。そのかいあって木の世話に熱心な何人かの農民に出会うことが出来たのだった。

「この2年間に根づかせることの出来た木はおぼろしい数字ですが、200本ってところでしよう。でもこれだけは確実に育っています」と福原は言う。彼の住まいの庭先には、ビニールポットから芽吹いた幾十という苗木が育てられていた。水撒きをしながら福原は、「誰でもいいんですよ、どうぞかっぱらって行って勝手にどこかに植えてくれ……と言ってもなんですがドロボーも入ってくれせんよ」と、自嘲げに笑うのだった。

ウアラムは、パリ〜ダカール・ラリーのコースになっている。テレビやグラビアでわたしたちが観る派手なレース・カー群の疾走を、福原は村人に混じって、砂埃りを浴びながら観たという。



# 30万本の苗木が全滅。砂漠化現象、最前線の深刻。

(左)暑い昼さがり、自室でくつろぐ福原隊員。蚊帳つき簡易ベッドと洗濯物を入れる段ボール、ラジオと数本のミュージック・テープを身の回りに配したシンプルな生活だった。炊事、洗濯は門番の男が面倒をみていた。(上)単行本『木を植えた男』は最近日本の友人から送られてきたもの。林学科を卒業した福原隊員が主に勉強してきたテーマは熱帯雨林であった。これまでの仕事上の最大の課題は、木を植える技術的な指導というよりも人々にどうやってやる気を起こさせるかであった。(中)ある日の昼食。牛肉の串焼き。肉は豊富だが、青野菜は手に入りにくい。(下)居間の壁からはがれかけているポスター。帰国した隊員からゆずり受けたものだという。

